スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因： Self-efficacy Model を中心に

筒井清次郎¹⁾ 杉原 隆²⁾ 加賀秀夫³⁾
石井源信⁴⁾ 深見和男⁵⁾ 杉山哲司⁶⁾

The psychological factors to regulate the sports carrer pattern: according to the self-efficacy model

Seijiro Tsutsui¹, Takashi Sugihara², Hideo Kaga³
Motonobu Ishii⁴, Kazuo Fukami⁵ and Tetsuji Sugiyama⁶

Abstract

The purpose of this study was to clarify the relationships between the sports career patterns and the psychological factors according to the self-efficacy model of Bandura.

The psychological factors were composed of an outcome expectation, the competence of sports, and the attitude toward the victory. An outcome expectation was divided between a positive outcome expectation and a negative outcome expectation by factor analysis. The attitude toward games was divided between the victory orientation and the recreation orientation by factor analysis.

The subjects were 1573 university students (male n=739, female n=834). They were divided into five sports career patterns (non participation, dropout, come-back, different sports adherence, and single sports adherence).

The results were as follows:

- 1) In an outcome expectation and the competence of sports, there were differences between the adherence patterns, the come-back pattern and the dropout pattern, and the non participation pattern.
- 2) In the competence of sports, there was a difference between the come-back pattern and the dropout pattern.
- 3) There was no difference between the single sports adherence pattern and the different sports adherence pattern.
- 4) In the victory orientation, there was a more clear difference in the sports career patterns of male than that of female.
- 5) In the recreation orientation, there was no clear difference in sports carrer patterns such as an outcome expectation and the competence of sports.

Key words: sports carrer pattern, self-efficacy, outcome expectation, competence of sports
(Japan J. Phys. Educ. 40: 359-370, March, 1996)

- 1) 愛知教育大学教育学部
〒448 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1
- 2) 東京学芸大学教育学部
〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
- 3) お茶の水女子大学文教育学部
〒112 東京都文京区大塚2-1-1
- 4) 東京工業大学工学部
〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1
- 5) 日本大学国際関係学部
〒411 静岡県三島市文教町2-31-145
- 6) 山梨英和短期大学
〒400 山梨県甲府市愛宕町360

1. Aichi University of Education, Faculty of Education, Igaya, Kariya, Aichi (448)
2. Tokyo Gakugei University, Faculty of Education, Nukuikita, Koganei, Tokyo (184)
3. Ochanomizu University, Faculty of Literature and Education, Otuka, Bunkyo, Tokyo (112)
4. Tokyo Institute of Technology, Faculty of Technology, Ookayama, Meguro, Tokyo (152)
5. Nihon University, Faculty of International Relationship, Bunkyo, Mishima, Sizuoka (411)
6. Yamanashi Eiwa Women Junior College, Atago, Kofu, Yamanashi (400)

キーワード：スポーツキャリアパターン、セルフエフィカシー、結果予期、運動に対する有能感

1. 問題と目的

青少年のスポーツ活動については、これまで数多くの研究がなされてきたが、そのほとんどは、スポーツへの参加、ドロップアウトなど単一の現象だけを取り上げている。しかし、実際のスポーツ行動としては、一つの種目を一途に継続する者（同一種目継続参加）、種目を変えて継続する者（異種目継続参加）、途中でやめるがある段階で再度復帰する者（中断後復帰）、ある段階でやめて現在もやっていない者（離脱）、もともと最初から参加していない者（不参加）など様々なパターンがある。

しかし、スポーツ活動のあり方に、何故このような違いが出てくるのかといった点を、明らかにしているものはみられない。このようなスポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因を明らかにする事によって、不参加者、離脱者、転移者などが、そのような行動を示すに至る心情や、生涯スポーツ実践を推進していく上での問題点が明らかになり、対応の糸口を示唆することができると考えられる。このことは、生涯スポーツ実践を推進していく上で、必要不可欠なことであると思われる。

複数のスポーツ活動パターンを比較した研究としては、参加者と不参加者の参加動機を比較した Roberts et al.²²⁾の研究や、継続者と離脱者の有能感や自己評価を比較した Feltz and Petlichkoff⁶⁾の研究があるが、いずれも、単一の現象のみについて、比較検討し、問題を指摘しているものの、時系列的な参加状況という観点から包括的にとらえてその差異を言及しているものはない。そこで本研究は、青少年のスポーツ活動を時系列的な参加状況であるスポーツキャリアパターンからとらえ、それらを共通に規定すると考えられる心理学的要因を明らかにすることを目的とする。

スポーツ行動を説明する理論的モデルとして

は、Sonstroem²⁵⁾の Psychological Model for Physical Activity, Rosenstock²⁴⁾の Health Belief Model, Noland and Feldman¹⁷⁾の Exercise Behavior Model, Fishbein and Ajzen⁷⁾の Theory of Reasoned Action, Ajzen¹⁾の Theory of Planned Behavior, Bandure²⁾の Self-efficacy Model などがある。

Psychological Model for Physical Activity は、Physical estimation and attraction scale を用いて、身体活動と自己評価の関係を説明するものである。このモデルの検証研究 (Sonstroem²⁶⁾) では、最初の運動関与についてはうまく説明できたが運動の継続の予測については有効でなかった。Sonstroem and Kampper²⁸⁾は、後に、Locus of Control の概念を導入して説明力を上げようとしたが、モデルの予測能力の向上には至らなかった。

Health Belief Model は予防的健康行動を説明するためのモデルで、期待値モデルを援用したものである。このモデルの問題は、モデルの要素を測定する尺度が不十分である点と、運動する理由として、病気を避けるためのみを想定している点である。

Exercise Behavior Model は、個人的な素因 (predisposition) と運動行動の関係を明らかにしようとしたものである。個人的な要因としては、(1)運動に対する Locus of Control, (2)身体活動に対する態度, (3)自己概念, (4)運動に対する価値をあげている。このモデルの検証研究 (Noland and Feldman¹⁸⁾) においても、運動行動の複雑さの一部を説明する可能性を示しているものの、モデル全体の有効性を検証するには至っていない。

Theory of Reasoned Action は、行動への態度 (結果予期) と社会的規範が運動に対する意図を決定し、運動に対する意図が、運動行動を決定するとしたものである。検証研究 (Sonstroem²⁷⁾, Pender and Pender²¹⁾) は、モデルを支持してはいる。しかし、Godin et al.⁸⁾は、理論と関係のない他の要因 (体重など) を入れた方が説明力が上がるという点で、運動行動のモデルとしては適切ではないと指摘している。

Theory of Planned Behavior は、Theory of Reasoned Action に行動の統制感を加えて説明するもので、Theory of Reasoned Action よりも優れてはいるが、運動の継続については触れていない。

Self-efficacy Model は、運動行動のみを説明するためのモデルではなく、効力感を媒介として、一般的な行動の開始と維持を説明するためのモデルである。Weinberg et al.³¹⁾, Desharnais et al.³⁾, Ewart et al.⁵⁾, Kaplan et al.¹⁴⁾, Dziewaltowski⁴⁾らによって、このモデルが運動療法における運動行動を説明できることが検証されており（詳しい概観は O'Leary²⁰⁾を参照されたし）、最近では、加賀ほか¹²⁾によって、中高年の運動行動についても説明できることが検証されている。以上のように、このモデルは現在のところ、運動行動を説明する最も有力な理論であると考えられる。そこで、本研究においても、このモデルによって、スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因を明らかにしようとした。

Self-efficacy Model は、人間が行動を起こす先行条件として結果予期と効力予期という二つの認知を想定している。結果予期とは、自分がその行動を実行した場合どのような結果が得られるかという予想である。これに対して、効力予期とは、自分がその行動をどの程度効果的に実行できるかと思っているかという自信であり、自己効力感とも呼ばれている。通常、結果予期と効力予期は問題にされる特定の行動について聞くことによって測定される。しかし、本研究では、多くの異なったスポーツ種目について測定する必要があるだけでなく、参加者と不参加者について共通の項目で測定する必要がある。したがって、結果予期、効力予期ともに、特定のスポーツ種目ではなく、スポーツ一般について聞くことになる。特に効力予期については、このようなより広い一般的な自信として聞く場合、有能感とほぼ同じ意味を持ち（祐宗ほか³⁰⁾）、同様の役割を果たすと考えられる。さらに、内発的動機づけの理論からして、有能感はスポーツ参加に関与する重要な要因となることが予想される。そこで本研究では、効力予期に相

当する変数として運動に対する有能感を取りあげることとした。

また、勝敗というのは、スポーツにおける基本的特徴であり、スポーツ行動を論ずる上で、触れるざるを得ない観点だと考えられる。たとえば、離脱の主な原因として、勝敗にこだわるのが嫌でやめた、ということがあげられている（Robinson and Carron²³⁾）。また、勝つことを追求する傾向は、同一種目の継続に、楽しむことを追求する傾向は、複数種目の経験と関連することが予想される。さらに、先行研究によれば、勝敗に対する態度には明確な性差がみられており（Kleiber and Hemmer¹⁵⁾）、同じキャリアパターンであっても、男女では異なる傾向を示すことも考えられる。そこで、2つの予期機能の他に、スポーツ行動に特有の要因として勝敗に対する態度を取り上げることとした。従来からスポーツ参加には、スポーツの勝敗に対する態度が重要な心理的要因であるという指摘もなされており（賀川ほか¹³⁾、岡沢ほか¹⁹⁾）、石井ほか^{9,10)}によって、運動部所属経験があり、対外試合の経験を多く持つものほど、勝った経験の多いものほど、また、厳しい練習を多く経験したものほど競技的志向性が高いことも報告されている。

そこで、本研究は青少年のスポーツ行動を複数のキャリアパターンとしてとらえ、それらと結果予期、運動に対する有能感、勝敗に対する態度との関係を明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

1) 調査対象

3つの国立大学と2つの私立大学の学生、男子739名、女子834名、合計1573名。

2) 調査方法

本研究のメンバーが、一般体育の授業の中で説明し、実施した。

3) 調査内容と尺度構成

(1) スポーツキャリアパターン

スポーツ少年団、スポーツ教室、スポーツクラ

ブ、学校の運動部など、体育授業以外に定期的に行ってきた運動・スポーツ名を、小学校、中学校、高校、大学について2種目まで回答を求めた。

(2) 結果予期

現在あるいは過去に行った運動について質問すると、運動実施者と運動非実施者との比較ができない。そのため、運動非実施者も回答できるように、これまでやったことのない新しいスポーツを始めた場合、どのような結果が予想されるかを、13の項目について回答を求めた。これらの項目は、従来の研究¹²⁾でスポーツ参加者が期待したり、非参加者が参加しない理由としてあげているものを考慮して選んだものである。各項目とも「非常にそう思うから」(4点)から「全くそう思わない」(1点)の4段階で評定させた。

(3) 運動に対する有能感

先行研究¹²⁾に基づき、身体・運動的な有能感を現すと考えられる健康、体力、運動技能、精神的側面に関して『あなた自身についてどのように感じているか』回答を求めた。項目は、「体力はある」「健康には自信がある」「運動は得意」「すぐにうまくなる」「運動が好き」「仲間と仲良く運動ができる」「挑戦するのが好き」「楽しめる」「活動的」といった9項目で、それぞれ4段階で回答を求めた。

(4) 勝敗に対する態度

「勝つことに意義」「勝ってこそ喜び」「魅力は

勝負」「仲良く楽しくできれば良い」「楽しむもので勝ち負けは重要ではない」「純粹に楽しむもの」「努力することに意義」といった、石井ほか^{9,10)}がこれまでに研究してきた勝敗に対する様々な考え方を含む態度項目から、15項目を用い、それぞれ4段階で評価させた。

3. 結 果

1) スポーツキャリアパターンについて

(1) スポーツキャリアパターンの分類

スポーツキャリアパターンの分類は次のような手順で行われた。スポーツ種目は2つまで記入できるようになっており、1番目と2番目の2つの記入欄が設けられている。ここには、どちらの欄がより重要であるかについての指示はなされていない。

スポーツ種目が合計8つの欄に記入されるが一つの種目が複数回記入された場合は、1番目2番目のどちらに記入してあっても記入回数をカウントし、記入回数の多い順に対象者の重要種目を決めていくこととした。尚、複数の種目が同じ回数記入されている場合は、1番目の欄に記入されているものの方を重要な種目とすることとした。つまり、種目の決定はまず、記入回数、次に同じ回数の場合は1番目の記入欄に書いてある方を考慮してなされた。

これらをわかりやすくするために、記号で表した。スポーツ種目を表す記号は◎○△□の4つ

表1 パターンの決め方の例

	順番	小学校	中学校	高校	大学	パターン
例1	1番目 2番目	ソフトボール サッカー	サッカー 未記入	サッカー 未記入	テニス 未記入	◎◎◎○
例2	1番目 2番目	ソフトボール 剣道	野球 未記入	テニス 卓球	スキー ゴルフ	◎○△□
例3	1番目 2番目	ソフトボール 剣道	野球 未記入	テニス 未記入	野球 未記入	○◎△◎
例4	1番目 2番目	未記入 未記入	卓球 未記入	バドミントン 未記入	テニス 未記入	×◎○△
例5	1番目 2番目	陸上競技 ソフトボール	未記入 未記入	陸上競技 未記入	テニス スキー	◎×◎○

で、スポーツを行わないことを表すのが×の記号である。スポーツ種目については、重要なものから◎○△□の記号の順に使うこととした。従って1種目の場合は◎、種目が増えるにつれて○△□の順に記号が使われる。例えばサッカー、テニス、野球が記入され、サッカーが3回、テニスが2回、野球が1回の場合はサッカーが◎、テニスが○、野球は△の記号で表される。これら◎○△□×の5つの記号の組み合わせから、キャリアパターンを分類した。パターンの決め方の例を表1に示す。

以上のような考えから小中高大の各段階にわたる種目への参加状況の変化を調べた結果、全部で52のパターンが認められた(表2参照)。次にこの52のパターンを、次に示すような5つの型に分類した。

1) 同一種目継続型 (103名)

同じ種目を小中高大または中高大(小は行っていない)と続けて行っている者。

2) 異種目継続型 (279名)

種目は異なるが小中高大、中高大、高大と何かの種目を行っている者。

3) 中断復帰型 (172名)

中高の両方か一方で、いったんスポーツをやめるがその後、やめる前と同じ種目又は新たな種目をはじめる者。

4) 離脱型 (650名)

中学か高校の段階でスポーツから離脱し、その後は定期的なスポーツに参加していない者。

5) 不参加型 (271名)

小中高大のすべての段階で一度も定期的にスポーツに参加していない者。

5つの型の男女別、全体の人数を図1に示す。

尚、52のパターンのうち5つのパターンは、上記の5つの型の典型的な特徴を示しているとは考えられないので、どの型にも含めなかった。

(2) スポーツキャリアパターンの男女差

5つの型の男女別の傾向をみると同一種目継続型、異種目継続型は男子の方が多く、中断復帰型、離脱型、不参加型は女子の方が多いという傾向がみられた。カイ二乗検定の結果、5つの型に

表2 キャリアパターン分類表

No.	パターン	分類	人数
1	◎◎◎◎	同一種目継続型	88
2	◎◎◎○	異種目継続型	32
3	◎◎○◎	異種目継続型	11
4	◎○◎◎	異種目継続型	3
5	○◎◎◎		62
6	◎◎○○	異種目継続型	18
7	◎○○○	異種目継続型	2
8	◎○○◎	異種目継続型	6
9	◎◎○△	異種目継続型	20
10	◎○△△	異種目継続型	4
11	◎○△◎	異種目継続型	8
12	○◎◎△	異種目継続型	42
13	○◎△◎	異種目継続型	7
14	○△◎◎	異種目継続型	35
15	◎○△□	異種目継続型	35
16	◎◎◎×	離脱型	61
17	◎◎×◎	中断復帰型	7
18	◎×◎◎	中断復帰型	5
19	×◎◎◎	同一種目継続型	15
20	◎◎○×	離脱型	38
21	◎○○×	離脱型	10
22	◎○×◎	中断復帰型	4
23	○◎◎×	離脱型	63
24	○◎×◎	中断復帰型	20
25	○×◎◎	中断復帰型	11
26	◎◎×○	中断復帰型	22
27	◎×◎○	中断復帰型	3
28	×◎◎○	異種目継続型	18
29	×◎○○	異種目継続型	4
30	×○○◎	異種目継続型	17
31	◎○△×	離脱型	46
32	◎○×△	中断復帰型	35
33	◎×○△	中断復帰型	7
34	×◎○△	異種目継続型	17
35	◎◎××	離脱型	63
36	◎×◎×		6
37	◎××◎	中断復帰型	2
38	×◎◎×	離脱型	42
39	×◎×◎	中断復帰型	11
40	××◎◎		6
41	××◎○		6
42	×◎×○	中断復帰型	23
43	×◎○×	離脱型	36
44	◎××○	中断復帰型	22
45	◎×○×	離脱型	17
46	◎○××	離脱型	113
47	×××◎		17
48	××◎×	離脱型	11
49	×◎××	離脱型	87
50	◎×××	離脱型	63
51	××××	不参加型	271
52	-----		1
人数の合計			1573

図1 キャリアパターン別にみた被調査者の分布

おける男女差は有意であった。

2) 結果予期について

尺度構成を行うために、因子数を指定せず因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行ったところ，2つの因子が抽出された（表3参照）。第1因子に負荷量の高い8項目は「上手になれる」「体力がつく」「気分転換になる」「友人ができる」「認められる」「楽しめる」「健康に役立つ」「就職に有利」といったすべて良い結果が得られるという内容のもので，「肯定的結果予期」と解釈した。8項目の評定を合計して肯定的結果予期待点とした。得点の幅は8点から32点の範囲で高いほどスポーツをすると良い結果が得られると考える傾向が強いことを意味する。第2因子に負荷量の

高い5項目は，「あきてしまう」「何の役にも立たない」「金や時間の無駄」「やりたいことができなくなる」「負けや失敗でいやになる」といった逆に良くない結果になるという内容のもので，「否定的結果予期」と解釈した。5項目の評定を合計して否定的結果予期待点とした。得点の幅は5点から20点の範囲で，高いほどスポーツをするに良くない結果が得られると考える傾向が強いことを意味する。信頼性係数（ α 係数）を算出した結果，第1因子0.80，第2因子0.74と十分高かったので，それらの項目によって結果予期を測定することとした。

肯定的結果予期1項目当たりの平均評定点を算出し，図2に示した。キャリアパターンと性の2要因の分散分析の結果，キャリアパターンの主効果が0.1%水準で有意であった。そこで，多重比較（Ryanの法）を行ったところ，不参加型が他のすべての型よりも有意に低い得点を示した。また，同一種目継続型と異種目継続型は，離脱型よりも有意に高い得点を示した（表4参照）。

また，否定的結果予期1項目当たりの平均評定点も算出し，図3に示した。全体的には得点が低く，スポーツ実施による否定的な結果はほとんど予期されていない。キャリアパターンと性の2要因の分散分析の結果，キャリアパターンと性

表3 結果予期の因子分析。VARIMAX 回転後の因子負荷行列

番号	項目内容	FACTOR 1	FACTOR 2
1	上手になれると思う	0.671	-0.240
2	体力を高めることができると思う	0.632	-0.232
3	気分転換やストレスの発散ができると思う	0.624	-0.087
4	多くの友人がしてくれると思う	0.621	-0.043
5	チーム内で認められる人間になれると思う	0.610	-0.099
6	楽しんでやれると思う	0.557	-0.081
7	健康の増進に役立つと思う	0.480	-0.120
8	就職に有利になると思う	0.338	0.060
9	しばらく続けるとあきてしまうと思う	-0.075	0.755
10	自分には何の役にも立たないと思う	0.016	0.682
11	お金や時間の無駄になると思う	-0.119	0.653
12	やりたいことができなくなると思う	-0.124	0.529
13	負けたり失敗していやな思いををすると思う	-0.087	0.447

図2 キャリアパターン別にみた肯定的結果予期

図3 キャリアパターン別にみた否定的結果予期

の主効果それぞれが0.1%水準で有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、女子の方が男子に比べて有意に得点が低く、マイナスの結果を否定していた。また、不参加型が他の全ての型よりも有意に高い得点を示し、スポーツにおけるマイナス面を強く認知していた。さらに、中断復帰型と離脱型も、異種目継続型や同一種目継続型よりも有意に高い得点を示した(表4参照)。

3) 運動に対する有能感について

尺度構成を行うために、調査結果について因子数を指定せず因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行ったところ、9項目について負荷量をもつ1因子が認められた。9項目の信頼性係数(α 係数)は、0.90と非常に高かったので、それらの項目によって運動に対する有能感を測定することとした。得点の幅は9点から36点の範囲で、得点が高いほど有能感が高いことを意味する。

運動に対する有能感の結果についても、1項目当たり平均評定点を算出し、図4に示した。キャリアパターンと性の2要因の分散分析の結果、キャリアパターンの主効果が0.1%水準で有意であり、性の主効果が1%水準で有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、男子の方が女子に比べて運動に対する有能感が有意に高かった。

表4 キャリアパターンと性別による2要因分散分析の結果

項目	主効果(多重比較)		交互作用
	キャリアパターン	性	
肯定的結果予期	同, 異>離>不 中>不 $p<0.001$	n.s.	n.s.
否定的結果予期	不>中, 離>異, 同 $p<0.001$	男子>女子 $p<0.001$	n.s.
運動に対する有能感	同, 異>中>離>不 $p<0.001$	男子>女子 $p<0.01$	n.s.
勝利志向性	男子 同, 異, 中, 離>不 同>離 女子 異>離, 不	男子>女子 $p<0.001$	$p<0.05$
レクリエーション志向性	不, 離, 中, 異>同 不>離, 異 $p<0.001$	女子>男子 $p<0.01$	n.s.

同 同一種目継続型 異 異種目継続型 中 中断復帰型 離 離脱型 不 不参加型

図4 キャリアパターン別にみた運動に対する有能感

た。また、キャリアパターンでは、同一種目継続型と異種目継続型が、他のすべての型よりも得点が有意に高かった。そして、中断復帰型と離脱型は不参加型よりも有意に得点が高く、不参加型は他のすべての型よりも有意に得点が低かった（表4参照）。

4) 勝敗に対する態度について

尺度構成を行うために、因子数を2に指定して因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行

ったところ、次の2つの因子が抽出された（表5参照）。第1因子に高い負荷量をもつ6項目は、「勝ってこそ喜び」「勝つことに意義」「悔しい思いをしたくないので勝ちたい」「魅力は勝負」「勝利の感激はなにものにもかえがたい」などで、すべてスポーツにおいて勝つことを重視するもので、「勝利志向性」と解釈した。ただし、項目10「学業の能率を上げるための手段」は因子負荷量が低いので尺度構成からはずすこととした。第2因子に高い負荷量をもつ9項目は、「純粋に楽しむもの」「ストレス解消」「余暇を楽しむ」「楽しむもので勝ち負けは重要ではない」「仲良く楽しく」など、すべてスポーツを楽しむことで共通しているが、低いものには「健康の保持増進のため」「苦しい思いまでして勝つ必要ない」「努力することに意義」といった内容のものが含まれており、解釈が難しい。ここでは、因子負荷量の高い5項目を重視し、「レクリエーション志向性」として尺度構成することにした。2つの尺度とも、5点から20点の範囲で得点が高いほどその傾向が強いことを意味する。信頼性係数（ α 係数）を算出した結果、「勝利志向性」5項目0.79,「レクリエーション志向性」5項目0.74となっている。

勝利志向性についても、1項目当たりの平均評

表5 勝敗に対する態度の因子分析。VARIMAX 回転後の因子負荷行列

番号	項 目 内 容	FACTOR 1	FACTOR 2
4	スポーツは勝ってこそ喜びが生まれるものである	0.771	-0.110
1	スポーツは勝つことに意義がある	0.710	-0.220
11	スポーツでくやしい思いをしたくないので、ぜひ勝とうと思う	0.689	-0.071
7	スポーツの魅力は勝負があるからである	0.647	-0.103
9	スポーツで勝ったときの感激は何ものにもかえがたい	0.556	0.049
10	スポーツは学業の能率を上げるための手段である	0.370	0.207
14	スポーツはただ純粋に楽しむものである	-0.111	0.650
2	スポーツは汗を流してストレス解消になればよい	0.046	0.606
3	スポーツは余暇を楽しむためにやるものである	0.035	0.592
5	スポーツは楽しむためのもので勝ち負けはさほど重要ではない	-0.350	0.577
12	スポーツは気のあった者同志で仲良くできればよい	0.005	0.565
8	スポーツは健康の保持増進のために行うものである	0.211	0.465
13	スポーツは苦しい思いをしてまで勝とうとする必要はない	-0.257	0.418
15	スポーツは勝敗よりも努力することに意義がある	-0.017	0.392
6	スポーツは日常生活の大切なもの犠牲にしてまで勝とうとするべきではない	-0.181	0.386

図5 キャリアパターン別にみた勝利志向性

図6 キャリアパターン別にみたレクリエーション志向性

定点を算出し、図5に示した。キャリアパターンと性の2要因分散分析の結果、両要因の主効果が有意であったが、交互作用も5%水準で有意であった。この交互作用は、図5から明らかなように、男子ではキャリアパターンによって勝利志向性に大きな差が見られるのに対して、女子で男子ほど差が大きいことを示している。そこで、単純主効果の検定を行ったところ、男女ともキャリアパターンの効果が有意であったので、男女別に多重比較を行った。男子では、不参加型が他のすべての型よりも勝利志向性が低く、最も勝利志向性の高い同一種目継続型と、2番目に低い離脱型の間にも有意な差がみられた。一方、女子では、最も高い異種目継続型と、最も低い不参加型及び離脱型の間にのみ有意な差が出たにすぎなかった(表4参照)。

また、レクリエーション志向性の結果についても、1項目当たり平均評定点を算出し、図6に示した。キャリアパターンと性の2要因の分散分析の結果、キャリアパターンの主効果が0.1%水準で有意であり、性の主効果が1%水準で有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、女子の方が男子に比べて楽しむことに価値を置いていた。キャリアパターン別でみると、同一種目継続型は、他のすべての型よりも有意に得点が低く、不参加型は、離脱型と異種目継続型よりも有意に得点が高かった。また、交互作用は有意では

ないものの、同一種目継続型の男子において、極端に楽しむことには価値を置かず、勝つことに価値をおいて取り組んでいる傾向を示した(表4参照)。

4. 考 察

本研究の主要な目的は、児童期から青年期にかけてのスポーツキャリアパターンを共通して規定すると考えられる心理的要因を明らかにすることであった。言い換えれば、結果予期と運動に対する有能感という心理的要因がスポーツ参加者と不参加者を区別するだけでなく、一度始めたのに離脱していく者や再び参加する者をも区別できるかどうかを検討することであった。その結果、スポーツ継続型、中断復帰型および離脱型、不参加型の三者の結果予期と運動に対する有能感に有意な差が認められ、Self-efficacy Modelの有効性が示された。

さらに、結果予期には中断復帰型と離脱型の間に有意な差がないのに対して、運動に対する有能感には中断復帰型と離脱型の間にも有意な差が認められた。このことは、結果予期よりも運動に対する有能感のほうがスポーツキャリアパターンと密接な関係があることを示している。有能感は内発的動機づけの中核と考えられていること、並びに結果予期の内容が調査項目から明かなように

ほぼ外発的動機づけに対応していることを考慮すると、スポーツの継続・離脱には両者がともに関係するが、内発的動機づけの方が外発的動機づけよりも重要であることが示唆される。杉原・小橋川²⁹⁾は、運動嫌いが形成される有力なメカニズムとして学習性無力感をあげており、スポーツからの離脱に有能感の裏返しとしての無力感が大きく関係しているものと推察される。

本研究で問題にした結果予期と運動に対する有能感は、同一種目継続型と異種目継続型の間に有意な差がなく、両者を区別することができなかった。同一種目継続型と異種目継続型には、心理学的要因に差があると考えるが、今回の研究方法上（運動実施者と非実施者を比較する）、新しい種目を始めた場合の結果予期を聞かざるを得なくなった。このような方法では、スポーツ一般に対する結果予期を聞いたことになり、同一種目継続型と異種目継続型の差を明らかにできない。もし、最初に始めた種目についての結果予期を聞けば、同一種目継続型と異種目継続型の差を明らかにできると考えるが、そうすると運動実施者と非実施者を比較することができない。この点については、方法上、更なる検討が必要である。

勝利志向性には有意な交互作用が見られた。図5から明らかなように、男子と女子ではスポーツキャリアパターンに与える効果が異なり、女子では男子ほどキャリアパターンによる明確な差が見られない。また、レクリエーション志向性では、交互作用はないものの、男女とも結果予期や運動に対する有能感ほどスポーツキャリアパターンによる明確な差は認められなかった。これらのことは、勝利志向性やレクリエーション志向性といったスポーツに対する態度とスポーツキャリアパターンの間に関係はみられるものの、結果予期と運動に対する有能感ほど重要な要因ではないことを示していると考えられる。

以上のことがらを全体的にみると、以下のようなことが考えられる。まず運動に対する有能感が非常に低く無力感を抱いており、スポーツをやっても良い結果は得られないと思っている者は、初めからスポーツに参加しない。スポーツを始めた

者でも、そこで期待した外的報酬が得られず、無力感を形成してしまった者はスポーツから離脱していく。一方、スポーツで有能感を高め、勝って外的報酬を得るという経験をする者は、スポーツを継続し勝つことが大事だという勝利志向性を強めていくと思われる。

5. ま と め

本研究の目的は、スポーツキャリアパターンに共通すると考えられる心理学的要因を明らかにすることであった。言い換えれば、結果予期、運動に対する有能感、及び勝敗に対する態度という心理的要因がスポーツキャリアパターンを区別できるかどうかを検討することであった。

その結果は、次のようにまとめられる。

1. スポーツ継続型、中断復帰型および離脱型、不参加型の三者の結果予期と運動に対する有能感に有意な差が認められ、Self-efficacy Modelの有効性が示された。
2. 結果予期には中断復帰型と離脱型の間に有意な差がないのに対して、運動に対する有能感には中断復帰型と離脱型の間にも有意な差が認められた。
3. 結果予期と運動に対する有能感は、同一種目継続型と異種目継続型の間に有意な差がなく、両者を区別することができなかった。
4. 勝利志向性においては、男子と女子ではスポーツキャリアパターンに与える効果が異なり、女子では男子ほどキャリアパターンによる明確な差が見られなかった。
5. レクリエーション志向性では、男女とも結果予期や運動に対する有能感ほどスポーツキャリアパターンによる明確な差は認められなかった。

本研究は、日本体育協会の「青少年のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究」プロジェクトの一貫として行われたものである。

文 献

- 1) Ajzen, I. (1985) From intentions to actions: A theory of planned behavior. In: Kuhn, J. and Beckman, J. (Eds.) Action control: From cognition to

- behavior. Springer-Verlag: New York, pp. 11-39.
- 2) Bandure, A. (1977) Social learning theory. Prentice Hall: Englewood Cliffs, NJ.
 - 3) Desharnais, R., Bouillon, J. and Godin, G. (1987) Self-efficacy and outcome expectations as determinants of exercise adherence. *Psychological Reports* 59: 1155-1159.
 - 4) Dziewaltowski, D. A. (1989) Toward a model of exercise motivation. *Journal of Sport and Exercise Psychology* 11: 254-269.
 - 5) Ewart, C. K., Taylor, C. B., Reese, L. B. and DeBusk, R. F. (1983) Effects of early postmyocardial infarction exercise testing on self-perception and subsequent physical activity. *American Journal of Cardiology* 51: 1076-1080.
 - 6) Feltz, D. L. and Petlichkoff, L. M. (1983) Perceived competence among interscholastics sport participants and dropouts. *Canadian Journal of Applied Sport Sciences* 8: 231-235.
 - 7) Fishbein, M. and Ajzen, I. (1975) Belief, attitude, intention, and behavior. Reading, MA.: Addison-Wesley.
 - 8) Godin, G., Cox, M. H. and Shephard, R. J. (1983) The impact of physical fitness evaluation on behavioral intentions towards regular exercise. *Canadian Journal of Applied Sport Science* 8: 240-245.
 - 9) 石井源信・岩本良裕・古屋正俊 (1984) 体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析. *東京工業大学人文論叢* 9: 115-127.
 - 10) 石井源信・岩本良裕・古屋正俊 (1987) 体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析(2). *東京工業大学人文論叢* 12: 41-48.
 - 11) 岩原信九郎 (1957) 教育と心理のための推計学. 日本文化科学社: 東京.
 - 12) 加賀秀夫・石井源信・嘉戸 修・菊 幸一・杉原隆・長見 新・深見和男・宮内孝知・雨宮輝也 (1993) 中高年のスポーツ参加に関する社会的・心理学的研究—第2報—. 平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告: 東京.
 - 13) 賀川昌明・石井源信・岡沢祥訓・米川直樹 (1979) スポーツ参加による態度変容の研究—勝敗に対する態度, スポーツマンシップに対する態度について—. *徳島大学教養部紀要 (保健体育)* 12: 9-24.
 - 14) Kaplan, R. M., Atkins, C. J. and Reinsch, S. (1984) Specific efficacy expectations mediate exercise compliance in patients with COPD. *Health Psychology* 3: 223-242.
 - 15) Kleiber, D. A. and Hemmer, S. (1981) Sex differences in the relationship of locus of control and recreational sport participation. *Sex Roles* 7: 801-810.
 - 16) McAuley E. (1992) Self-referent thought in sport and physical activity. In: Horn T. S. (Eds.) *Advances in sport psychology*. Human Kinetics Publishers: Champaign Illinois. pp. 101-118.
 - 17) Noland, M. P. and Feldman, R. H. L. (1984) Factors related to the leisure exercise behavior of returning women college students. *Health Education* 15: 32-36.
 - 18) Noland, M. P. and Feldman, R. H. L. (1985) An empirical investigation of leisure exercise behavior in adult women. *Health Education* 16: 29-34.
 - 19) 岡崎祥訓・石井源信・賀川昌明・米川直樹 (1981) スポーツマンシップに対する態度の研究—大学女子における態度形成要因について—. *体育の科学* 31: 362-365.
 - 20) O'Leary, A. (1985) Self-efficacy and health. *Behavioral Research and Therapy* 23: 437-451.
 - 21) Pender, N. J. and Pender, A. R. (1986) Attitudes, subjective norms, and intentions to engage in health behaviors. *Nursing Research* 35: 15-18.
 - 22) Roberts, G. C., Kleiber, D. A. and Duda, J. I. (1981) An analysis of motivation in children's sport: The role of perceived competence in participation. *Journal of Sport Psychology* 3: 206-216.
 - 23) Robinson, T. T. and Carron, A. V. (1982) Personal and situational factors associated with dropping out versus maintaining participation in competitive sport. *Journal of Sports Psychology* 4: 364-378.
 - 24) Rosenstock, I. M. (1974) The health belief model and preventative health behavior. *Health Education Monographs* 2: 355-387.
 - 25) Sonstroem, R. J. (1974) Attitude testing examining certain psychological correlates of physical activity. *Research Quarterly* 45: 93-103.
 - 26) Sonstroem, R. J. (1976) The validity of self-perceptions regarding physical and athletic ability. *Medicine and Science in Sports* 8: 126-132.
 - 27) Sonstroem, R. J. (1982) Attitudes and beliefs in prediction of exercise participation. In: R. C. Cantu and W. J. Gillespie (Eds.), *Sport medicine, sport science*. Heath: Lexington, MA. pp. 3-16.
 - 28) Sonstroem, R. J. and Kampper, K. P. (1980) Prediction of athletic participation in middle

- school males. *Research Quarterly for Exercise and Sport* 51: 685-694.
- 29) 杉原 隆・小橋川久光 (1988) スポーツに対する好みと興味. 末利博ほか編 スポーツの心理学. 福村出版: 東京, pp. 71-85.
- 30) 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊編 (1985) 社会的学習理論の新展開. 金子書房: 東京.
- 31) Weinberg, R. S., Gould, D., Yukelson, D. and Jackson, A. (1981) The effect of preexisting and manipulated self efficacy on a competitive muscular endurance task. *Journal of Sport Psychology* 1: 345-354.
- 32) Weiss, M. R. (1993) Psychological effects of intensive sport participation on children and youth: Self-esteem and motivation. In: Cahill, B. R. and Pearl, A. J. (Eds.) *Intensive participation in children's sports*. Human Kinetics Publishers: Champaign Illinois. pp. 39-69.
- 33) Willis, J. D. and Campbell, L. F. (1992) *Exercise psychology*. Human Kinetics Publishers: Champaign Illinois. pp. 79-91.

(平成7年5月31日受付)
(平成7年11月18日受理)